

同化の夢語り —蔡萬植「痴叔」のアイロニー—

相川 拓也

요약

채만식의 「치숙」은 일본을 이상화하는 화자가 일방적으로 사회주의자인 아저씨를 매도한다는 서사를 지닌 단편 소설이다. 이런 “어그러진” 화자의 설정이 식민지 시기 사회에 대한 풍자로서 평가되어 왔지만, 이런 평가가 해방 후라는 시점에서 사후적으로 화자에게 내린 가치판단이라는 점에서 문제가 있는 것으로 보인다. 본고에서는 화자가 말하는 일본을 향한 동화(同化)의 논리를 검토하는 동시에 아이러니로서 텍스트를 재고한다. 「치숙」이란 텍스트에서는 화자가 말하는 동화의 꿈이라는 서사 자체가 일본의 “내선일체”론의 모순을 폭로하고 있는 한편 이 화자 앞에서 폐병으로 누운 채 침묵하는 아저씨의 무기력함이나 민중과의 괴리도 동시에 상대화된다. 「치숙」은 일본으로의 동화를 믿고 지향하는 것이 아무런 생산적인 기능을 할 수 없다는 현실을 그려내고 있다. 이런 점에서 이 소설은 화자의 경박함과 지식인의 무기력함을 동시에 비판한 쓰디쓴 아이러니인 것이다.

키워드 : 蔡萬植, 痴叔, 同化, 植民地主義, アイロニー

1.はじめに

『濁流』や『太平天下』といった長篇小説、種々の中・短篇小説や戯曲で知られる蔡萬植^{チマンシク} (1902~1950) は、語ることへのこだわりをその創作を通じて一貫して見せつけたという点で、植民地期朝鮮において突出した作家であると言える。蔡萬植文学のこうした特徴は韓国で、日本による統治下にあった当時の社会を諷刺やアイロニーを交えて描いたものとして評価されてきた¹。1938年に発表された「痴叔²」という短篇小説も、そうした蔡萬植評価の文脈の中で読まれてきたと言ってよいだろう。

「痴叔」は、4年制普通学校を卒業し、京城(ソウル)のとある商店で働いている語り手が、自分のおじ(テキスト上の設定によれば5親等にあたる間柄であり、日本語で言うところの「いとこおじ」にあたる)を一方向的に痛罵するという内容の小説である。このおじは朝鮮から東京へ渡って勉強したのち社会主義運動に身を投じ、そのために投獄され、獄中で肺病を患い、現在は妻であるお婆の看病を受け、細々と文筆をしながら暮

らしている人物である。語り手は一方で「屍みたいになったその旦那」(261 ページ)の世話をしなければならぬお婆の境遇に同情しながら、「うちの店のタイション³が僕を格別に可愛がって信用してくれる」(267 ページ)という現在の自分の境遇を誇示・正当化し、「生活の仕方から内地人みたいにすれば、お金も内地人みたいにたくさん稼げるようになるんですからね」(268 ページ)と自身の夢を語る。その一方で、語り手にとって目障りなおじに対しては「爪の先ほども使いようがないし他人に迷惑ばかりかけるし、世の中の毒になるばかりの人なんだから、もう一日も早く死ぬべきですよ」(278 ページ)という言葉で浴びせる。

この小説は、おじを一方向的に非難・罵倒することで披瀝される語り手の価値観がそもそも歪んでおり、テキストにおいて真に批判されているのは語り手であるというアイロニーを表出したものとして読まれることが、現代の韓国では一般的と言える⁴。語り手が称揚する帝国日本による支配を否定したうえに成立した社会である現代の韓国で、こうした読みが行われるのはある意味で当然であろう。旧宗主国である日本の現代の読者にとっても、この「痴叔」の語り手が語る内容を額面どおりに受けとることは、抵抗を感じざるをえない人が多いだろうと思う。だが、このような読み方は戦後／解放後の価値判断が先行してしまうという点で問題がないとは言えず、読解そのものもともとすると平板になりがちな憾みがあることは否定できないだろう。

管見の限りでは、現在に至るまで「痴叔」の日本語訳は存在しない。また、「痴叔」の内容にまで踏み込んだ具体的な紹介としても、現状ではおそらく南富鎮^{ナムフジン}の著書を挙げることができるのみである⁵。南富鎮は、先述のような読解の「民族主義」的な面を批判するという立場から「痴叔」に描かれた同化の問題を論じているのだが、そこでは「痴叔」というテキストのアイロニカルな面を捨象したうえで語り手の同化の欲望が「内鮮一体が自然に確保される方向」へ向かうものとして捉えられ、「朝鮮人による日本語への傾斜は民族への変節や強要によるものではない。幅広い植民地の大衆的な欲望から自然に生まれてきたものである」という結論が導き出されている⁶。こうした南富鎮の立論は、現代韓国での「痴叔」受容に見られるような民族主義に対する批判という文脈があるにせよ、帝国日本による植民地支配を正当化する歴史修正主義へと容易に接続していつてしまう危うい議論となってしまう。

本稿は、南富鎮によってある意味で不幸な形で日本に紹介されてしまった「痴叔」というテキストを読みなおし、植民地支配の正当化、あるいは「親日」行為の事後的な断罪のどちらにも加担しない形での読解を試みることで、そのアイロニーがいかなる次元にあるものかを明らかにすることを目的としている。そのための方法として、まず語り手の論理を検討し、おじへの一方向的な罵倒や自身の欲望の披瀝を通じて表出される「内地」への同化がどのようなものとして想定されているのかを明らかにする。そこで明らかになった同化の論理が含み込んでしまう矛盾を検討するとともに、そのような矛盾を

抱えた語り手の一人称の語りによってのみテキスト全体、ないしおじの姿が語られているという「痴叔」の特徴を、蔡萬植の他の作品とも比較しながら考察する。こうしたテキスト内在的な分析をもとに、歴史修正主義にも事後的な断罪にもよらない形で、「痴叔」という小説のアイロニーがどのような性質のものであるかを明らかにしたい。

2. 同化の論理—語り手の自分語り

「痴叔」の語り手が披瀝する日本志向にはどのような背景があるのだろうか。語り手が自分の生い立ちや生活を語る部分を中心に検討しながら、まずはこのことを明らかにしたい。

「痴叔」の語り手は7歳で両親を亡くしたのち、「そのときちょうど冷たくされて実家暮らし」(263 ページ) をしていたおばに引き取られる。おばの実家は当時としては裕福な方であり、他に子供がなかったこともあって、おばをはじめ、大おじ、大おばにも可愛がられたというふうに語り手は回想している。彼はそこで12歳まで暮らし、その間に「4年だけでも普通学校も通った」(263 ページ) とされている。

語り手の育ての親といえるおばは、夫であるおじによって苦勞させられた女性として同情的に描かれる。おばは16歳のとき、当時15歳のおじと結婚(当時としてはいわゆる旧式の「早婚」といってよいだろう)したが、おじは勉強のためにソウル、そして東京へ行き、東京で女学生と親しくなり、おばは実家へ帰される。社会主義運動に奔走していたおじはやがて逮捕され、おばの婚家も実家も没落してしまう。寄る辺のなくなったおばは、そのときすでにソウルで生活していた語り手を頼って上京する。この時がおじの釈放1年前だとされる。ソウルへ来たおばは、「ボクが若造でも方々かけずり回った甲斐あって、すぐにクラタサシのところのお手伝いさん」(262 ページ) として働くことになる。

語り手はそのようなおばに対して、自分の店の主人とも知り合いだという男性との再婚を勧める。

折しもちょうど、またいいご縁がありましてね。ミネサシっていう、ミツヨシの前でバナナのタタキウリやってる人なんですけど、ほんとにいい人なんです。

うちのタイシヨもよく知ってるんですけど、その人がいつもボクに朝鮮のオカミサシと暮らせればいいと、仲立ちしてくれと、そう言ってましたよ。

お金の蓄えはなくても食べていけるくらいの稼ぎはあるし、そんな人と一緒に暮らせばおばさんも身の上が楽になるんじゃないですかね？

そんなことを、それで何度か言っても、縁起でもないことを言うなど聞いちゃくれないのはどういうことでしょう。(262～263 ページ)

京城の日本人と親しく付き合う語り手の（語り手に即して言えば）「好意」を聞き入れないお婆の態度を、ここでの語り手は理解することができないでいる。こうして夫の釈放を待ちながら、お婆は家政婦として1年働いて少しずつ貯金をし、その金で部屋を借りて釈放されたおじを迎える。そして、刑務所にいる間に肺病を患ったおじを看病しながらの生活を送ることになる。そのため、おじの釈放後も夫婦の生活は苦しく、語り手によって「あのしょうもない旦那をもらってからは、針内職だとかよそんな家の洗濯物とか化粧品売りとか、そんなしみつたれの仕事をしてやっとかつと口を糊してますよ」（261 ページ）と語られる。こうしたおじお婆夫婦の生活に対して語り手は、お婆に迷惑をかけつづけるおじを非難しながら次のように語る。

もともと、心を決めて何かやろうたって前科者だから官吏とか、それから会社みたいなどころへは入れないだろうけど、そりゃ自分がしでかしたことなんだから誰かを恨むようなことじゃないし、だから思い切って労働でもしないと。

大学出身が日雇い労働なんてざまは見ものだけど、それもしょうがないさね、まったく。

それに対してちょっとボクのことを考えてみれば、もしうちの大おじさんの家がそれほど傾かないでボクも専門学校を卒業していたら、もしかしたらうちのおじさんみたいになってたかもしれないし、むしろ勉強をたくさんしないでこの道へ入ったのが幸いだ……こんなふうに思いますよ。（264～265 ページ）

一方、語り手の現在までの生活と将来の展望は、おじと対比されて極めて明るいものとして語られる。語り手は「他人の店でコゾーをやってバントーをやって、こうして何とかやってきたおかげで、こう見えても表彰を2回も受けた模範店員だし、他人からはしっかりしてて才覚があって真面目だとびっくりするくらい褒められて、将来の明るい有望な青年」（269 ページ）である自分自身を誇りに思うことを隠さない。そうした自己像を立脚点として、次のような「ボクの理想と計画」（267 ページ）が語られる。すなわち、「ボクを格別にかわいがって信用してくれている」（267 ページ）主人のもとであと10年ほど働いた末に独立し、それから還暦まで30年働く間に「きっと10万円貯めるつもり」（267 ページ）であるという、言ってみれば典型的な資本主義的成功の夢である。

このような、店の主人を通じて将来のある時点で与えられる（はずの）独立、そしてそれによって成し遂げられることが夢想される成功は、「内地」的なものへと近づいていくことがその実現の要件であるかのように語られている。店の主人は語り手に対して「内地人の閨秀」（267 ページ）との結婚を仲立ちすると言っているとされ、それを受けて語り手は「内地の女はほんとに良いですよ」（267 ページ）と興奮を隠さない。そのうえで、「内地の女を嫁にするだけじゃなくて、姓名も内地人の姓名に変えて、家も内

地人の家に住んで、服も内地の服を着て、食事も内地式にして、子供たちも内地人の名前をつけて内地人学校へやらせて……」(268 ページ)、さらには「ボクも朝鮮語はすっかり使わないようにして、国語だけ使いますしね」(268 ページ)と、あらゆる生活様式を「内地」へ同化させていくことが夢見られていく。こうした語り手の同化の欲望がかき立てられるのは、「こうやって全部生活の仕方から内地人みたいにすれば、お金も内地人みたいにたくさん稼げるようになる」(268 ページ)からにはほかならない。語り手の資本主義的成功の夢は、まさに「内地」との親交によって成し遂げられると想定されていることが、ここではあからさまに語られているのである。

自らの成功のために「内地」を志向していくことを語るなかに織り込まれているのは、朝鮮的なものの否定である。語り手が好む「内地」の女性に対して、朝鮮の女性は旧女性であれば「無知で内地人と交際するのに良くないし」(267 ページ)、近代教育を受けた新女性も「文字が読めるなんてのが生意気でいけない」(267 ページ)として、いずれにしても否定的評価が下される。また学校についても、「内地人学校でなきゃ、朝鮮学校は汚らしくて子供を捨てておくようなものですよね」(268 ページ)と、自らも通ったはずの朝鮮人学校⁸を、やはり「内地人」向けの学校と対比することで価値の低いものと位置づけている。別の箇所では、「漢字ごとにカナを振ってあるから、どんな部分を聞いてみてもすらすら読み下せて意味がよくわかる」(270 ページ)『キング』や『少年倶楽部』のような日本語雑誌を一方で称揚しながら、「読み難い^{オンムン}諺文とごちゃごちゃした漢字を混ぜ書きした文章」(270 ページ)だらけの朝鮮語雑誌は、語り手にとっては読むに堪えないものとされる。こうした語りからうかがえるのは、資本主義的成功のため、という功利的な動機から生まれた「内地」志向が、やがて自己否定とも言える朝鮮的なものの否定と結びつき、「内地」を志向すること、すなわち同化そのものが自己目的化していくさまだと言える。しかしそれは、意識的に生活様式を「内地」式に改めつつ「国語」だけを使うように努めるといふ、日常のなかで常に緊張を強いられるような(こう言ってよければ)不自然な生活を志向していくことにほかならない。そして、朝鮮語雑誌を読むのに難儀する語り手は、日本語雑誌にしても振り仮名があるからこそ「すらすら読み下」すことができるのに過ぎない。「内地」人の妻を得、「内地」式の生活をしてみても、「内地」人との間に横たわる懸隔は容易に埋められるものではない。そのことを知ってか知らずか、「10万円といえば朝鮮の金持ちのなかでも大金持ち」(267 ページ、傍点引用者)と、語り手は自身の最終目標を、あくまで朝鮮人との比較のなかで測られるものとして語っている。

すでに日本の資本によって文化的・経済的に掌握されていた京城という都市⁹で、日本人との親交という回路を通じてある種の立身出世を夢見ることと、朝鮮的なものを否定・唾棄することとが結びついてしまう。それは、語り手の語りが端なくも露呈するように、意識的・積極的に模範的な「内地」人として振る舞わなければならないとい

うある種の不自然さを、自らに強いるものでしかない。

よく知られているように、1937年に勃発した日中戦争の激化にともない、朝鮮では当時の総督である南次郎が提唱した「内鮮一体」というスローガンのもと、植民地でのより強固な戦時体制確立のために、朝鮮人に対する日本への同化政策が強化された¹⁰。支配者側の言う「内鮮一体」が日本、あるいは天皇への忠誠心を持った兵員の養成、すなわち朝鮮への徴兵制施行を究極の目的としていたのに対し、被支配者である朝鮮人はこのスローガンに支配者側とは異なる意味を読み取り、知識人らを中心に「皇民化」＝同化政策に加担していく¹¹。朝鮮人がそこに見たのは、支配者側から差し出された可能性としてあった差別からの脱出であり、日本への同化を通じて達成されると想定された近代化の夢であった。しかし、そうした平等や近代化の前提とされる日本への徹底的な同化、完全なる皇民化は、どこまでも不断の努力を積み重ねなければならない性質のものであり、「代を継いで、ただひたすらに、さらなる皇民化に向って、歩みつづける無限の道程¹²」にほかならなかった。そして、同化の目標である「日本人」と、その目標に向かって歩きつづける朝鮮人との間に横たわる距離は、支配者側が一方向的に握っていた基準である「皇民化の度合」によって測られることで、原理的に消滅することはありえなかった。支配者である日本側が平等を語りながら差し出した「内鮮一体」が意味した同化とは、「断えず二歩も三歩も先を歩み続ける日本人の後を、感謝の念をこめて従順について来る朝鮮人¹³」となることであり、差別を温存し合理化する矛盾した論理でしかなかった。

「内地」人並みの経済的成功を夢見、積極的に「内地」への同化を指向していく語り手は、皇民化を手段とした最終的な差別の撤廃を唱えたこの時期の朝鮮人知識人の言説に、まさに従順に呼応した大衆の一人といえるかもしれない。しかし、生活習慣や名前、日常で使う言語までも「内地」式に改めるという努力の末に夢見られる「10万円」という語り手の蓄財目標額が、建前上は平等であり競合相手となるはずの日本人を除外した上で「大金持ち」とされていることに見られるように、語り手の夢の最終目標にあっても、「内地」人との距離は消滅することがない。「内地人みたいにたくさん稼げるようになる」ことを夢見ながら、最終的に「内地」人を除外した基準によってその夢の達成を測ろうとする語り手の語りには、先に見たような「内鮮一体」というスローガンに込められた同化の論理の矛盾が刻み込まれているのである。

以上のような、語り手の「内地」への同化を通じた資本主義的成功の夢は、さらにより具体的な対象への嫌悪をも呼び出すことになる。すなわち、「痴叔」という小説の語りの中心を成すおじへの罵倒である。社会主義者として設定されるおじを罵倒するに際して、語り手は自分の働く店の主人から聞かされた「社会主義」観に依拠している。次節では語り手が「社会主義」をどのようなものとして理解し、テキストの後半を成すおじとの（究極的には語り手のモノローグといっても良いような）「対話」の場面が成立

しているのか、そしてその「対話」を通じて一方的に描かれるおじの人物像について、検討を行う。

3. おじとの「対話」

語り手が、「うちの店のタイショーが詳しくみんな話してくれました」(265 ページ) といって披露する「社会主義」なるものは、次のようなものである。

この世の中には金持ちと貧しい人がいるわけだが、それはまったく公平なことではない。人間というのはおんなじ顔立ち身体つきで生まれてくるのに、誰々は金持ちでいい暮らしをして、誰々は貧しいなんて、それでいいのか。だから金持ちの持っているものをわれわれ貧しい人々とみんな公平に分けちまうのが正しい。

やあ、そりゃ全くだ。やあ、そりゃあいい。さあ分けちまおう。

ああ、こうやって説教して、愚かにも立ち上がったということなんですね。

いや、それでそれはたちの悪いごろつきどものやることじゃなくて何なんですか
い？ (265～266 ページ)

このように、店の主人の入れ知恵によって語り手が理解する「社会主義」なるものは、「働くのが嫌いな怠け者何人かが、堂々と集まって遊んで食っていくための思案」(265 ページ) に過ぎないものであり、それは「世の中を滅ぼす張本人」(266 ページ) と位置づけられる。そしてこのように理解された「社会主義」は、語り手の抱く資本主義的成功の夢に対して有害なものとなる。「世の中が滅んでひっくり返ったら、じゃあボクはどうしろってことでしょうか？ 何もかもみんな無駄になっちゃうだろうに、そんな悔しいことがあるかい？」(268 ページ) というわけである。そのうえでなお、「うちの店のタイショーの言うことはいちいちもつともですよ」(268 ページ) というふうに、店の主人の考え方の正当性が語り手によって担保されることになる。

ごろつきと変わることはない「社会主義」にうつつを抜かし、おぼとの生活を省みない(と、少なくとも語り手にとってはそう理解されている) おじは、こうして語り手による痛罵の対象となるのである。

小説の後半、仕事が休みの日におじおば夫婦の家を訪れた語り手は、おばが仕事に出ていて留守だったため、病気で寝ているおじと2人になってしまう。居場所のない語り手はおじの枕元に積んである古い朝鮮語の雑誌を1冊手に取る。語り手は興味の沸かない朝鮮語雑誌を、「もしやマンガとか写真でもあるかと思ってページをパラパラめくっていると」(271 ページ)、その誌面におじの名前を見つける。「題名の最初は経済・社会……とかなんとか」(271 ページ) というおじの論説の内容を、語り手は自分の予断にもとづいて以下のように推測する。

経済は、おじさんが大学で経済を勉強したんだから経済の中身はよく分かってるだろうし、それに社会は、そりゃやっぱり社会主義をやってたんだからその中身もよく分かってるだろうし、だから経済と社会主義と、お互いどんなふうに関係があって、どっちが正しくてって、そういうことを書いたのに決まっていますよ。

なに、見ても見なくても中身はお見通しです。大学まで行って経済を勉強してもお金を貯めようとはしないで、社会主義ばかりやってきた旦那だから、経済が間違っていて社会主義が正しいと言い張ってるんでしょうからね。(271 ページ)

語り手はおじの書いた文章を読んでみるものの、難解なために理解できず読むのをあきらめ、「おじさんをちょっと問い詰めるような感じでその部分を開いて」(271 ページ) おき、「おじさんがここで経済がどうのとか、社会がどうのとか書いてますけど、じゃあそれは経済をしろってことですか？ 社会主義をしろってことですか？」(271 ページ) と、自らの予断に基づいて推測した内容をおじに確かめようとする。だが、語り手のこの荒唐無稽な問いを、もちろんおじは理解することができない。それを見て語り手は、「自分が書いても時間がたって全部忘れてしまったのか、あるいはボクが言葉を難しくしすぎたせいですぐに答えが出ないのか、そんなところでしょうね」(271 ページ) というふうに、自らの優位を疑わないままおじと対峙する。おじが、経済学は「金を貯める学問」ではないと言ったところで、語り手は「それじゃあおじさんは大学の勉強を間違えたんですよ」(272 ページ) と返すばかりで、2 人の「対話」はすれ違いながら、語り手が一方的に主導する形で進んでいく。

語り手が自分の理解する限りの世界観に基づいておじを詰問する一方で、おじはそれに積極的に反駁することができない。おじが語るのは、「勉強を間違えた？ はは。そうかもしれない。そうだ、お前の言うのが正しいな！」(272 ページ)、「計画や機会をどれだけ無理にこしらえても、結果が思い通りには行かないということだ」(275 ページ)、「空は登ってみなけりゃ高いことが分らんか？」(275 ページ) といった、言ってしまえば「敗者の弁」でしかない。そして語り手から、苦勞させているお婆について聞かれると、おじは口ごもってしまう。

「お婆さんをありがたく思わないですか？」

「ありがたいさ」

「かわいそうでしょう？」

「かわいそう？ そうさ、かわいそうと言えばかわいそうな人だよ！」

「そうはお思いなんで？」

「思うさ」

[……中略……]

「だったらおじさんもおばさんにその恩を少しは返すのが道理じゃないですか？」

「ああ、恩を知らないのではないんだが……」

「じゃあもう病気も明らかに治った後なんだろうし……」

「忙しくてな……」(277～278 ページ)

帝国日本による厳しい弾圧を受け、社会主義運動がほぼ壊滅状態に追い込まれていた総動員体制期前夜の朝鮮人知識人の無力感が、こうした「敗者の弁」を引き出していることは言うまでもない。その無力感ゆえか、語り手のナイーヴな「内地」への同化の夢、あるいは妄想すら、おじは説得的に考えなおさせることができない。語り手とおじの「対話」は、自らの未来の明るいことを単純に信じ込み、おじを悪罵する語り手の一方的な語りに対して、おじがいつそう敗北感を深めながら最後には沈黙するという形で終わってしまう。「それでもまあ死にもしないでたらだら生き延びてて煩わしいったら、ったく……」(278 ページ) という、小説冒頭と何も変わらない語り手のモノローグによって小説が閉じられているのは、この「対話」が何物かを生み出すような性質のものではないことを如実に語っている。そこにあるのはただ、語り手の自己陶醉と、敗者としてのおじの沈黙だけである。

このような「対話」ならぬ「対話」の末、語り手によって沈黙させられるおじの姿は、一人称の語り手によって一貫して否定的に描かれている。このことは、「痴叔」と同系列の蔡萬植小説と比べて特徴的な点である。蔡萬植の代表作のひとつである「レディメイド人生¹⁴」は、主人公である職のない朝鮮人知識人 P の内面に寄り添った三人称の語りによって成り立っており、自伝的要素も指摘される。日本統治化で「太平」の世を謳歌する吝嗇な金満家の尹斗燮^{ユンドッソプ}を主人公にした長篇『太平天下¹⁵』は、その終幕で、東京留学中の尹家の孫が社会主義運動に身を投じたことが明らかになり、そのことによる尹斗燮の発狂と一家の没落が暗示されるが、テキスト全体が反語に満ちた諧謔的な調子で語られることで、尹斗燮一家の謳歌する「太平」の世そのものの虚妄さを読者に強く印象づけるものとなっている。

「痴叔」の語りを正面から、また表面的に読むならば、ここで皮肉られているのは「レディメイド人生」の主人公 P を彷彿とさせる無気力な知識人のおじである。彼は、非論理の無知な語り手との対話の回路をはじめから持っていないかのように描かれている。そして、語り手はおじに、おばのことをかわいそうだと思わないのかと問い詰め、おじはそれに答えて「お前のおばさんを見たって、苦が苦でありながら苦ではなくて、苦勞するのが楽なんだよ」(277 ページ) と強弁するが、最終的にはあえなく沈黙させられてしまうことになるのは、先に見たとおりである。

ある意味で語り手は、同化政策が強化される中、「内地」への同化が経済的成功の条

件であることを敏感に嗅ぎ取るしたたかな生活者であると言える。その語り手に、針仕事や洗濯といったジェンダー化された低賃金労働によって生計を維持するおばのことをどう考えているのかとなじられ、どうすることもできずに黙り込んでしまう知識人のおじ。「痴叔」の語りを一面的にとらえれば、浮かび上がってくるのはこのような、時局の中で何事をもなすことのできない知識人としてのおじの姿である。ここでは、おじをはじめとする知識人たちの活動が、おばや語り手のような知識人ならざる人々と乖離したものでしかないということが照射されていると言える。語り手の同化を通じた経済的成功の夢が虚妄であるのと同じように、「忙しくてな……」という台詞とともにもっとも身近なはずのおばの苦境から逃避するおじの行動も、現実から遊離した無意味なものとしてここで痛烈に批判されているのである。「痴叔」のテキストは、「内鮮一体」の幻想を信じる語り手にその矛盾を語らせるとともに、その語り手の目を通じて、帝国日本の植民地統治に抵抗する存在であったはずの社会主義者／知識人の姿を相対化している。それはあるいは、作家自身の苦々しい自己批判とも言えるようなものでもあったかもしれない。

4. 結び

ここまで見てきたように、「痴叔」という小説は、帝国日本によって経済的・文化的に掌握された京城という都市の中での成功を夢見、「内地」への同化を通じてその夢の実現を図ろうとする語り手の論理が、日本による資本主義化と植民地化に対する抵抗の末に挫折した敗者としてのおじを圧倒し、沈黙させていくという構造を持つテキストである。そこでは、「内地」への同化を夢見る語り手の声が支配的な地位にあるとあってよい。

だが、語り手の披瀝する「内地」への同化を通じた資本主義的成功の夢は、原理的に不自然なものでしかありえない。朝鮮人である語り手にとって、資本主義的成功への回路として想定される「内地」への同化は、日常生活の中で意識的に「内地」的なものへの同化を遂行しつづけなければならないという性質のものであった。そこでは朝鮮での「内地」的なものの優位性や権威は疑われることがない。朝鮮人である語り手は、自らの成功のための同化を遂行しつづけることはできても、その成功の度合いはあくまで「内地」を除いた尺度によって測られるほかない。先に見たように、こうした「内地」への同化（とそれによる経済的成功）の夢の語りはその裏で、支配者の提唱する「内鮮一体」が「日本人」と「非日本人」を隔てる無限にして伸縮自在の距離を温存することで、朝鮮人に対する差別を正当化する論理であることを語ってもいるのである。そのうえ、語り手が自らの成功の前提としている商業的独立も、それが今の店の主人から果たして10年後に与えられるものなのかどうか、それが語り手の独善的と言ってもいい自己評価に基づいている以上、究極的には決定不可能である。このように、テキストにおいて支配的な語り手の語りは、その実きわめて曖昧で漠然とした夢語りでしかなく、その

語りが暗示する社会の雰囲気としての「内鮮一体」の矛盾までも含み込んでしまっている。

語り手の語る同化の夢は、以上のとおり虚妄である。しかし、「敗者の弁」以外の言葉を語る術を持たないおじは、語り手の同化の夢の虚妄さを穿つことができない。最終的に語り手によって沈黙させられてしまうおじは、肺病を病んで一日中布団で寝ているうえに満足な発言能力も与えられない無力な存在として語られる。その無力さは、おじにとって最も身近な他者であるおばをめぐる語り手との「対話」の中で露呈する。このことによって、おじをはじめとした当時の知識人の活動の空虚さや無意味さ、民衆との乖離が示されていると言える。突き詰めれば帝国日本の朝鮮支配に対する抵抗となるであろう朝鮮人知識人／社会主義者であるおじの姿も、この小説においては冷徹なまでに相対化されているのである。

「痴叔」の語り手が語る「内地」への同化の夢、そしておじへの罵倒は、以上のような意味で決して自然な欲望の表現として語られているのでもなければ、民族への背信として事後的に断罪して済むようなものでもない。独善的な語り手のモノローグが支配する「痴叔」というテキストからまず読み取ることができるのは、日中戦争下の朝鮮をおおった「内鮮一体」の不毛さである¹⁶。自己正当化の言葉の中に、自らの論理の矛盾を抱え込んでしまう語り手と、その語り手によってあえなく沈黙させられるおじ。この小説は、植民地期朝鮮における対照的な2人の男性の姿を共に相対化し、語り手の不毛なモノローグを余韻として響かせる。語り手が信じて疑わない「内地」への同化、すなわち「内鮮一体」という帝国日本による支配の方便への順応。あるいは、そうした順応によってのみ社会的成功を手に入れることができる時代において、周囲を顧みずに無気力な知識人として日々を過ごすこと。「痴叔」という小説は、そのいずれもが何物をも生み出すことがないという、総力戦体制期前夜の朝鮮での現実を描き出している。それは、「内地」への同化をナイーブに信奉し経済的成功を収めようとすることの軽薄さを諷刺するとともに、それを前にしてどうすることもできない知識人としての自己批判をも刻み込んだ、苦々しい陰影をともなったアイロニーなのである。

註

- ¹ たとえば、윤영옥 「채만식 풍자소설의 서사기법 연구」 전북대학교 대학원 박사논문, 1999年など。
- ² 蔡萬植 「痴叔」 『東亞日報』 1938年3月7日～14日。本文中での引用は上記初出および『蔡萬植全集』第7巻, 서울: 創作功批評社, 1989年に基づく拙訳により、『蔡萬植全集』のページ数のみを示す。
- ³ カタカナ表記で傍点を付した部分は、朝鮮語原文中で日本語がハングル表記されて用いられている部分を示す。

- ⁴ こうした解釈を示したものとして、張良守「俗物の 垂直的 意識考: 蔡萬植 短篇, 「痴叔」의 경우」『睡蓮語文論集』第 10 輯, 1982 年、および表正玉「놀이의 서사시학: 1930 년대 김유정, 이상, 채만식의 놀이성(Ludism)을 중심으로」서강대학교 대학원 박사논문, 2002 年など。
- ⁵ 南富鎮『文学の植民地主義: 近代朝鮮の風景と記憶』京都: 世界思想社、2006 年。特に第 2 章「植民地の言語空間」。
- ⁶ 南富鎮前掲、116~136 ページ。
- ⁷ 当時の三越百貨店京城支店。1930 年に竣工した鉄筋コンクリートの近代建築で、近代都市京城を象徴する建物のひとつだった。新世界百貨店本店本館として現存する。
- ⁸ 植民地期朝鮮の初等教育はその全期間を通じて実質的に民族別学であり、朝鮮人児童（「国語を常用せざる者」）には普通学校が割り当てられていた（義務教育制は実施されていない）。日本人向けの小学校がすべて 6 年制であったのに対し、普通学校は 6 年制と 4 年制があり、1934 年以降は 2 年制の簡易学校も創設された。授業料の上限額設定が日本人用の学校に比べて高く、学校そのものの数や定員も入学志望者数に対して少なかったため、朝鮮人児童の就学率は植民地支配の期間を通じて一貫して低く抑えられた。また、普通学校での教育は基本的に職業教育が重視され、6 年制の学校であっても上級学校への進学を想定しない終結教育という側面が強かった。こうした植民地期朝鮮での被植民者向け近代教育の特徴については、金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー: 就学・不就学をめぐる権力関係』横浜: 世織書房、2005 年、および金富子『継続する植民地主義とジェンダー: 「国民」概念・女性の身体・記憶と責任』横浜: 世織書房、2011 年、37~49 ページ参照。
- ⁹ 朴用來「大京城商圈解剖」『朝光』1936 年 2 月号では、大規模経営商店を中心とした京城の商業の大半が、日本人に握られていることを統計的に論じている。また、日本からの強い影響を受けた京城の都市文化については数多くの研究があるが、歴史学的手法によるものとしては、최병택, 예지숙『경성 리포트: 식민지 일상에서 오늘의 우리를 보다』서울: 시공사, 2009 年を参照。
- ¹⁰ 以下の記述は、宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』東京: 未来社、1985 年の第 IV 章「「内鮮一体」の構造」、および、小熊英二『〈日本人〉の境界: 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』東京: 新曜社、1998 年の第 16 章「皇民化と「日本人」」を参照した。
- ¹¹ 当時もっとも激烈に「内鮮一体」の現実化を訴えたものとして、玄永燮『朝鮮人の進むべき道』[京城]: 緑旗聯盟、1938 年。
- ¹² 宮田前掲、155 ページ。
- ¹³ 宮田前掲、167 ページ。
- ¹⁴ 初出は『新東亞』1934 年 5 月~7 月号。日本語訳は蔡萬植（布袋敏博、熊木勉訳）『太平天下』東京: 平凡社、2009 年所収。
- ¹⁵ 初出は「天下太平春」のタイトルで、『朝光』1938 年 1 月~9 月号。解放後に『太平天下』서울:

同志社、1948年として単行本化。日本語訳は、蔡萬植（布袋敏博、熊木勉訳）前掲に所収。

- ¹⁶ 駒込武は帝国日本の同化政策を歴史的に検討した上で、その政策の性質を、「思想・感情の同一化に敵対的な要素を排除するネガティブな原理としては機能しても、新たな文化統合の創出というポジティブな機能は不十分にしか果たしえなかった」「形骸化を約束された理念」であったとしている。駒込武『植民地帝国日本の文化統合』東京：岩波書店、1996年、363～367ページ。

